新見公立短期大学紀要　第26巻
二四一～二五四頁、二〇〇五年

論稿

沖縄・多良間島の平家伝説

原田信之
（日本文学）

多良間島には、十六世紀に島を統治した土原豊見親春源の父親「ペーンス（平屋西）」が平家の流れをくむヤマト（日本）の人であったという平家伝説がある。また、春源のおじで水納島を統治していたとされる「水納ペーンス」はペーンスの弟で、春源の多良間統一に協力したという伝承がある。南西諸島においては、源氏と平氏をめぐる伝説がそれぞれ存在しているが、通常、沖縄県には平家伝説はほとんどないとされている。日本と多良間との交流は海の道を通じて昔から存在したこと、ペーンスは日本から来た人物であった可能性が高いこと、「ヤマト墓」が存在すること、『遺老説伝』等にみえる「平屋西」という表記の存在（平家を連想する）などが多良間島の平家伝説の発生に重要な役割を果たしてきたと推定される。また、琉球王権北端の奄美と琉球王権南端の先島に平家伝説がある点が注目されるが、その理由の一つとして、奄美も先島も首里と地理的に離れているため琉球王権の影響力が比較的緩やかであったことが関係しているように思われる。

（キーワード……平家伝説、多良間島、琉球王朝）

はじめに

『中山世鑑』（一六五〇年成立）・『中山世譜』（一七二五年成立）・『球陽』（一七四五年初回編集）等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統（一一八七～一二五九）以降、英祖王統（一二六〇～一三四九）、察度王統（一三五〇～一四〇五）、第一尚氏王統（一四〇六～一四六九）、第二尚氏王統（一四七〇～一八七九）と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中

世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。これらの王統のうち、本稿では、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七～一五二六在位）の時代に活躍したとされる宮古諸島多良間島の首長土原豊見親春源の父とされる「ペーンス（平屋西）」という人物の出自をめぐる伝説を中心として扱う。民間伝承の世界における英雄たちの有様は実に生き生きとしており、聞く者の心をとらえてやまない。文献資料からはうかがえない生々しい英雄たちの活躍の有様から、我々は、多くのことを学ぶことができる。これらの民間伝承資料は、史実と虚構の間にあり、資料的位置づけが極めて難しいため歴史的資料とみなすことはできないが、これらの民間伝承の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。しかし、これらの民間伝承は、いずれ消え去る運命にある。採集不可能となる前に、現時点での残存資料の総まとめをしておく必要があろう。

宮古・八重山諸島は、一三九〇年（明・洪武二十三年、日本・元中七年）に中山王察度に入貢してから一六〇九年（慶長十四年）の島津の琉球侵入まで琉球王国の統治下にあったとされる。この中山王察度への入貢に関しては、『中山世鑑』察度王の項に「洪武二十三年（一三九〇）庚午、南夷、宮古嶋・八重山嶋、重訳、始来貢ス」[1]とあり、『中山世譜』洪武二十三年の項にも「本年。宮古・八重山。始来称臣、納貢于中山。」[2]と同様の記述がある。また、『球陽』巻之一にも察度王の四十一年（一三九〇）に宮古八重山が始めて来朝入貢したと記されている。これらの記述から、宮古・八重山諸島が中山王察度に入貢したのは一三九〇年とみられるわけであるが、『球陽』巻之一によれば、その時入貢したのは宮古の与那覇勢頭豊見親であったという。[3]

宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する多良間島（たらまじま）は、面積約二十平方キロのやや楕円形の島である。多良間島の北方約十キロには面積約二平方キロの細長い水納島があり、両島で多良間村（沖縄県宮古郡）を構成している。毎年旧暦八月に行われる豊年祭「八月踊り」は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。多良間島では、島を統一したとされる土原豊見親春源に関する伝説が濃密に伝承されている。土原豊見親は、八重山のオヤケ・アカハチの乱や与那国の鬼虎征伐で功をあげた十六世紀に実在した人物である。また、興味深いことに、多良間島には土原豊見親の父親「ペーンス（平屋西）」が平家の流れをくむ人物であったという「平家伝説」がある。これら土原一族にまつわる諸伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要なてがかりを与えてくれる。

本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、多良間島を統治していたという土原豊見親の父親「ペーンス」をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝関連伝説の一側面を考察することを目的とする。[4]

一　春源の父ペーンスと平家

多良間島の首長であった土原豊見親春源（ぬたばるとぅゆめしゅんげん）の生没年は不詳であるが、十六世紀に実在した人物であった。『球陽』巻之三の尚真王二十四年（一五〇〇）の「始メテ多良間島主ヲ置ク」の項には「宮古山ノ土原豊見親、マタ仲宗根豊見親ニ跟随シテ、八重山ヲ征伐シテ、功ヲ成シテ凱旋ス。是レニ由リ、聖主深ク之レヲ嘉奨シ、

遂ニ土原豊見親を擢ンデ、、多良間島主ニ陞為シ、称シテ豊見親職トナス。[5]」と記されている。この記述から、土原豊見親が尚真王に八重山征伐の功績を認められた人物であったことがうかがえる。

多良間島で調査すると、現在でも土原豊見親春源に関する伝説を多数聞くことができる。土原豊見親は仲筋集落の「八月踊り」が行われる「土原ウガン」（多良間村字仲筋土原里七〇六）で出生したとされる。そして、興味深いことに、多良間島には、土原豊見親の父親「ペーンス」は平家の流れをくむ人物であるという伝承が存在している。

〈事例1〉「ペーンスは平家の生まれ」

これは、平家の生まれだと、いうふうに言われていたから。これは、ペーンス。平（たいら）、平屋西（ひらやにし）と、書いて、ペーンスというんですよね。平屋西。だから平屋西（ひらやにし）の、生まれじゃないかと、言われているんですけど。ペーンス。これもペーンスです。そして、水納（みんな）にもあるんです。水納島にも。ペーンス。そして、鍛冶屋したとか何とか。当時は、金物は、まれ（稀）でしょ。そういうなのが、あったということですがね。だからペーンスというのが、水納にもおった。水納島にもおった。（二人のペーンスは）まあ兄弟連中か、何かでなかったかな。平家の落武者が。こちらは、源氏が、首里王なんかはあれしてるから、平（たいら）を用いて、平屋西（ひらやにし）というふうに、言ったと、いうふうなことですね。

春源のお父さんだけでないと。これもペーンスの名（めい）だったんじゃないかと。源氏が、こちらは、沖縄のあれなんかを治めているから。こう、平家の、平（たいら）だけを取って、平屋西（ひらやにし）と、いうふうに、してあるんじゃないかというふうな言い伝えですよね。で、これは、多良間の言葉ではペーンスというんです。平屋西（ひらやにし）。屋根の屋ですね。[6]

〈事例1〉は、土原春源の父のペーンスは平家の生まれで、春源の父の兄弟に水納ペーンスという人物もいたという伝承があるという語りである。〈事例1〉の話者によると、春源の父のペーンスはヤマト（日本）の人であったという言い伝えがあるそうである（多良間島で調査中、ヤマト出自説については複数の話者から聞いた）。「ペーンス」は多良間島では通常「平屋西」と表記される。この表記は『雍正旧記』『遺老説伝』等にみられる記述を使用しているものとみられる。

首里王府の命令で一七二七年（清・雍正五、日本・享保十二）に報告編纂された『雍正旧記』の「多良間嶋」の項に、運城御嶽と泊御嶽の由来として次のような話が記されている。

右両御嶽の由来ハ、昔神代に仲筋村の主、平屋西筋と申人の男子おそろと申者有之候。此人、幼少之時より心正直にして、朝夕天を拝候処、致成人弥信仰を発し、運城・泊両所に山を仕立、天神を請待仕度旨右両山に三七日籠、御願仕候処、運城には嶋守の神、泊山ニハ舩路守の神、天降被召。神代には、願に応し跡を垂給ふによって御嶽と仰き、至爾今作物の初を祭、村中崇敬仕候事。[7]（句読点・傍線原田）

また、琉球の正史『球陽』の外巻『遺老説伝』（一七四五年成立）には、同じ話が次のように記されている。

往古の世、宮古山仲筋村の主、平屋西なる者有り。一男を生得す。名を折曽盧と曰ふ。其の人と為りや、生質正直、心操誠実なり。幼稚の時より、天を仰ぎ日に向ひ、朝夕拝礼す。已に成長するに及び、

愈々以て諸神を尊信し、香を焚きて拝礼し、稍しも間断あらず。遂に運城及び泊の地に、竹樹を栽植して、以て神嶽と為す。而して三七日、彼の二嶽に搬在し、沐浴斉戒し、朝より晩に至るまで、恭しく祭品を供へ、香を焚きて拝礼し、天神の出現し、以て霊効を示さんことを請招す。即ち誠心天に感じ、霊験最も速く、護国庇民の神、運城嶽に出現し、亦管海守船の神、泊嶽に出現する有り。此れよりの後、邑中の人、皆以て尊信し、毎年五穀の初を薦祭す。[8]

（傍線原田）

これは、仲筋村の主であった「平屋西」（雍正旧記「平屋西筋」）の男子「折曽盧」（雍正旧記「おそろ」）が運城嶽と泊嶽を造ったという話であるが、この話の「平屋西」が土原春源の父の「ペーンス」で、その男子「折曽盧」が春源の幼名である。現在の多良間島では春源の幼名を方言で「ウドゥル」といい、通常は「宇増呂」と表記される。この話にあるように、多良間島では運城御嶽と泊御嶽は春源が造ったと伝承されている。

また、多良間島には「土原豊見親ぬニィリ」という古謡が伝承されている。このニィリ（神歌）は、土原御願や多良間神社の例祭、運城御嶽や泊御嶽のプーリ（穂礼祭）でもうたわれていたという。残念なことに、現在では伝承者がいないということであるが、採譜されて文献資料に残されている。その「土原豊見親ぬニィリ」の冒頭の歌詞は次のとおりである。

むたばるぬ　ふむぬにん　（土原の　村の根に）
とゥゆたる　（とどろいた）
シュラードゥー　（末栄え）
ユーフーマーシャレ　（よく勝れ）
ぴゃーにすぬ　うぷとゥゆめ（平屋西の　大豊見親の）
なかから　（中から）
ふらとゥゆめ　ゆかるふァば（子の豊見親が　佳き子が）
まりまい　（生まれ）[9]

（以下略。傍線原田）

この「土原豊見親ぬニィリ」全体の歌詞は、土原豊見親をたたえる内容となっており、省略したこの部分以降には、土原豊見親が宮古島や沖縄島に行って公務をこなしたり、首里勢頭（国王）に会って多良間全域の三原（仲筋・塩川・水納）の主となるよう命じられて多良間島を統治した様子がうたわれている。注目されるのは、この「土原豊見親ぬニィリ」という古謡の冒頭に、土原村の平屋西（ぴゃーにす）大豊見親の子として土原豊見親が生まれたことが語られている点である。ここの「ぴゃーにす」が春源の父の「ペーンス」である。

〈事例2〉「春源の父ペーンス」

（土原）豊見親（とぅゆめ）のお父さん。ペーンス。それを平屋西（ひらやにし）と書いたりしてますが、私は、仮名で書きなさいと言っている。ペーンスと、仮名で。そのお父さんの名前というわけ。それであの、豊見親（とぅゆめ）という言葉は、敬称なんですよね。土原豊見親（ぬたばるとぅゆめ）の豊見親は本当の豊見親だけれども、それ以外のこちらで豊見親と言われるのは、敬称。まあ、優れた人だったと言われるのがまあ、豊見親というわけ。これは、土原豊見親はまだその時点では、子どもか何かで。だからペーンスと普通言うてるんだが、そのペーンスを、豊見親を付けてペーンス豊見親というふうな言い方をしたり

もするわけですね。

（平家の落武者という）その話もありますよ。その話もありますけれども、年代的に見た場合にですね、ちょっとつながらないですね。平家の落武者じゃないか、という話はあるんですけれども、つながらないんですね、年代的に。[10]

〈事例2〉は土原豊見親春源の父のペーンスが平家の落武者という話はあるが、年代的につながらないという語りである。十六世紀初頭に活躍した春源は十五世紀末頃の生まれと推定されるので、父のペーンスは明らかに十五世紀の人とみてよいであろう。壇ノ浦の戦は一一八五年（元暦二・文治元）のことであるから、十五世紀のペーンスと約三百年の開きがある。年代的にはつながらないことは明らかであるが、ペーンスが平家落武者の流れをくむ日本人、つまり「平家の子孫」であったとすると、その可能性は否定できないことになる。伝承の面白さはそこにあり、問題は、なぜ多良間島に平家伝説が存在することになったのかという点にある（なお、多良間島で調査中、ペーンス自身が壇ノ浦の戦から落ち延びた平家の落武者であったと語る話者にも出会った。現在の多良間島にはそのような伝承も一方であることは確かである）。

先にみた「土原豊見親ぬニィリ」に「ぴゃーにすぬ　うぷとゥゆめ（平屋西の　大豊見親の）」とあるように、春源の父は「ペーンス豊見親」とも呼ばれる。「豊見親」は古代宮古島の首長の尊称であるが、〈事例2〉で語られているように、春源の父ペーンスに付された豊見親は「敬称」で、正式な「豊見親」を意味するものではない。しかし、『雍正旧記』に「仲筋村の主、平屋西筋」とあり、『遺老説伝』に「宮古山仲筋村の主、平屋西」とあることから、仲筋村の首長のような立場にいた人物と認識されていたらしいことがうかがえる。

春源が生まれた地という「土原ウガン」にはペーンスの屋敷があったとされている。また、土原ウガンの八月踊りの舞台の左よりにコンクリートの高い台が造られており、その上には土原豊見親（向かって右側）とその祖父（向かって左側）と天神（真ん中）を祭るというコンクリートの香炉が三つ安置されている。さらに境内の北部には土原豊見親の両親のペーンス夫妻を祭るという小祠があり、中に香炉が安置されている。[11]なお、土原豊見親の祖父であるが、土原ウガンに香炉が祭られてはいるものの、残念ながらどういう人物であったかについての伝承を聞くことはできなかった。

II　春源のおじ水納ペーンス

多良間島の伝承によると、春源の父とされるペーンスには、弟がいたという。春源の父はペーンスと呼ばれているが、水納島（みんなじま）に住んでいたという春源のおじにあたる人物は「水納ペーンス」または「水納ペーユヌス」と呼ばれている。なお、「水納ペーンス」と「水納ペーユヌス」が同一人物かどうかは不詳であるが、多良間島で調査した範囲では、両者が同一人物として語られていたため、本稿では両者を同一人物として考察を進めた（「水納ペーンス」と「水納ペーユヌス」の表記の統一は行わなかった）。

〈事例3〉「水納ペーユヌスとトゥユメガー」

水納島にはですね、水納（ミンナ）ペーユヌスといって、豊見親（とゥゆめ）のおじさんにあたる人がいたそうだ。この人の、ミンナペーユ

ヌスの、元の家は仲筋の方にあるんですけど。ここには系図もあったんですよ。あるんです。現在残ってるけど。虫干しもしないでほとんど虫にやられてるんじゃないかなあ。

海で生活したというだけですねえ。彼が、ミンナペーユヌスが網を洗ったっていう井戸は、今はもう空井戸になってるけどねえ。そんな程度しか、残ってないねえ。それと、ただ独特の、形式が残ってるのは、水納遠見台。台が造ってあるわけじゃないけど。ただ、平たいですよ。自然井戸はトゥユメガーといって、牧場に行く所にあるんですがね。水納島の。トゥユメガー。これは土原豊見親（ぬたばるとぅゆめ）が、造ったと言われてるんですがね。自然井戸なんですよ。自然井戸だから、造ったというよりも、改修したんじゃないですか。[12]

〈事例3〉は水納島には春源のおじとされる水納ペーユヌスという人物がおり、水納ペーユヌスが網を洗ったという井戸や、春源が造ったというトゥユメガーという井戸があるという語りである。多良間島で調査すると、水納島にいた春源のおじの水納ペーンスは春源が多良間を統一する際に手助けをし、水納島を統治した人物として知られている。次に春源が多良間を統一する際に水納ペーンスに助けを求めた時の話を提示する。

〈事例4〉「水納ペーンスの刀とウドゥル」

あれは、ここのペーンスの弟だという伝え。だから水納（ミンナ）ペーンス。まあ、土原春源の、おじさんにあたる、ていわれてます。水納ペーンスにまつわる伝説はですね、十五世紀末に、春源のことを、幼名は、ウドゥルというんですよ。そのウドゥルが、あちらこちらに散在している諸勢力を、統一する場合に、ちょっと手ごわい相手がおるということで、その水納島に渡って、そのおじさんの知恵を借りようと、いうふうに、行ったら、網を修理して座っておって、そのウドゥルの頼みに別にこう、大きく答えようとはしないで、

「何も心配する必要はない。この自分が今網をこう修理している小刀。小刀一本あれば、もう、どんな相手にも、屈しない」と、いうこと言われるもんだから、『そんなばかな話があるか』と、ウドゥルは考えたんですね。

「嘘だと思うなら、そこに、鶏を、集めてみるから」というふうにして、エサをちょっと投げたら鶏が集まった。その集まった鶏に、そのナイフを投げたら、何匹か、殺したというわけ。これだけの威力があるんだと、いうふうにしてそれを、渡してやったと、いう説もあります。まあこれも、伝説じゃないですかねえ。そんな小刀、考えられませんが。まあ、考えられるのは、兵力じゃなかったかなあと思う。方法、まあ応援、だったんじゃなかったかなあ。そのようにこうおる鶏に、使っておる小刀を、ぽんと投げたらすぐ切れよったと。[13]

〈事例4〉はまだウドゥルと呼ばれていた頃の春源が、多良間の諸勢力を統一する過程で手ごわい相手がいるためおじの水納ペーンスに知恵を借りに行ったところ、不思議な殺傷力を持つ小刀を授けられたという話である。

この話は『多良間村の民話』には「土原豊見親と水納ペー刀」と題されて所収されている。[14] そのあらすじは、塩川村と仲筋村の戦争があった時、仲筋村が負けそうになったため、土原豊見親が水納島のおじに相談に行くと、水納ペーユヌスが不思議な小刀をくれ、その刀を使って塩川村を退治して多良間を平和な島にした、というものである。『多良間村

の民話』所収話で、大正六年生まれの水納島の話者が、「水納ペーユヌシ加那志とは私たちの氏神様。今、現在でも奉って、皆な大事にして、年中行事も欠かさずやっている」[15]と語っているように、水納ペーユヌスは水納島で神様として祭られてきた。

一九六〇年代には二十数名あった水納島の人口も次第に減少し、現在（二〇〇四年九月時点）では一家族が住んでいるだけであった。水納島の元集落の北方の小高い丘に水納御嶽（多良間村字水納石泊二三三）がある。水納御嶽は現在も奇麗に整備されており、御嶽の前には多良間村教育委員会による看板（平成八年三月十五日付）が立てられている。その看板には「ここ水納御嶽は、土原豊見親のおじに当たる「ミンナペーユヌス」を祭神としてまつる御嶽である。境内は福木、黒木、モクタチバナ、テリハボクなどが繁茂する美しい神域である。祭神「ミンナペーユヌス」は、土原豊見親時代に水納島を統治した業績のある人として、住民はその徳を崇敬して信仰は厚い。すべての年中行事はこの御嶽で住民が集まって行われる。社殿や祭具などの保管も行き届き、いかにも神々しい感じを受ける（後略）」と記されている。現在のコンクリート製の神屋は平成九年に改築されたもので、神屋の前に「水納御嶽改築記念碑」が立っている。境内には、神木として大事にされているという黒木の老木をはじめ多くの古木が生え、厳かな神域を形成している。

『雍正旧記』の「水納村」の項に、水納御嶽の由来として「同御嶽神名豊見やお不そけと唱／右由来ハ昔神代に城たけと申所に天神五穀御持下候をくし原よのし水納へ屋よのしと申もの弐人にて拝候て此所御嶽に仕成祭来為申由にて中古迄祭申候事」[16]（傍線原田）と記されている。この記述から、水納御嶽は「くし原よのし」と「水納へ屋よのし」の二名が「豊見やお不そけ」という神を祭ったことに由来するらしいことがわかる。この「水納へ屋よのし」が春源のおじの「水納ペーユヌス」と同一人物であったかどうかはよくわからないが、「水納へ屋よのし」と「水納ペーユヌス」が同一人物であったとすると、水納御嶽を造った「水納ペーユヌス」は、春源の多良間統一に協力して水納島を統治した功績により、後代、自らが水納御嶽に祭られるようになったと推定される。なお、『琉球国由来記』には水納島には「城花持御嶽」があるとあり、神名は「豊見トモソヘ豊見キナキ」「ミモノガネ豊見ソラヘトカ豊見」の二神で、その由来は「不伝」と記されている。[17]「城花持御嶽」は「水納御嶽」の異称とされている。[18]

Ⅲ　多良間島の平家伝説

では次に、多良間島の平家伝説の問題について検討してみることにする。調査中、多良間島の平家伝説について、次のような話を聞くことができた。

〈事例5〉「多良間島の平家伝説」

それで、平家の流れ。ここまで流れてきたということです。平家の流れでないかと。これも確定ではないんですけどさ。そういったような話ですから。平屋西（ひらやにし）というふうな人もおる。で、まあ、沖縄を統治してるのは、源為朝の、子孫が、継いだとか何とか、というふうな。沖縄の歴史ですよね。だからこの、源家（みなもとけ）に、源氏に、こちらにおいては、対抗できないから、平屋西（ひらやにし）というふうに、改名したとか何とかというふうな話を聞いてるんですが。そ

んなもんじゃないかと思うんですね。これと、土原豊見親（ぬたばるとうゆめ）と、関係はあるかないか、知らないけれどとにかく、多良間には、平家が流れてきた。流れてきて、もう当時岩の下に、ほじくってそこで、雨露しのいだということがあるんですよ。こっちにもあるし仲筋にもあるし塩川にもあるんですよね。ほいで戦後、今度の、大東亜戦争後まで、その骨はあったんです。私たちもわかるんです。[19]

〈事例5〉は、多良間島には、平家が流れてきて岩の下で雨露をしのいだという伝承があるという語りである。源為朝の子孫が沖縄を統治しているため、平氏だと源氏に対抗できないことから、平屋西（ひらやにし）と改名したという話も聞いたことがあるということである。雨露をしのいだとされる場所が仲筋にも塩川にもあり、大東亜戦争後までその骨があったという。

〈事例6〉「大和墓（やまとばか）の由来」

昔、シュクヌ家という家に司がいらっしゃったらしい。そして、お供え物の食べ物とか水などを、神様に供えていたそうです。ところが、花生けの水までも全部、なくなっていたので「どうしたんだろう」と不思議に思っていると、ある日、山の中からやせた顔の男の人が出て来て、「実は、ここの食べられそうな物は私が毎日食べていました」と言うと、「それなら私が、家から食べ物を運んであげよう」と毎日通っていたそうです。それでその男の人は、恩返しに墓を造ってあげたいと相談したらしく、大和墓を造ってあるよ。その人の名前はペーンス豊見親とおっしゃったらしいよ。[20]

〈事例6〉は、ペーンス豊見親が大和墓を造ったという話である。〈事例1〉のところでも述べたように、ペーンスはヤマト（日本）から来た人であったという言い伝えがあり、〈事例6〉の話もヤマトから来たものの食べ物が無いのでお供え物の食べ物や水などを食べて飢えをしのいでいた様子が語られている。多良間島にはヤマト墓と呼ばれる墓が二カ所ある。「ヤマトウバカ」（仲筋字トリホグ里九番）と「イリ（西）ヤマトウバカ」（仲筋字トリホグ里十三番）がそれである。[21] ペーンスがヤマト墓を造ったかどうかは不明であるが、ペーンスにこのような伝承がある点は、ペーンスの出自を考えるうえでも非常に興味深い。

ところで、首里王府編『琉球国由来記』（一七一三年成立）巻二十には、多良間島の運城御嶽と泊御嶽の由来として次のような話が記されている。

二嶽ノ由来。昔物語、多良間島伊知ノアジト申人女房ヲバ、ホナマヤト云フ。夫婦共ニ慈悲正直ヲ宗トシテ、平生、仏神信仰アリ。或時、夫婦列ニテ人数余多相催シ、嶺間ト云フ所ヘ耕作ニ出ケルニ、四海浪上リ、召列ノ者潮波ニ引流サレ行方シラズナリニケル。伊知ノアジ夫婦計生残リケル。是偏ニ、慈悲正直故天ノ恵ニテ可有之ヤト、島中致感嘆也。其後、三人ノ子ヲ儲ケル。男子ヲバ土原大殿ト名付。女子二人アリ。姿形モヤサシク、姉ハ、多良間島一方ノ主ハリマ大殿女房ニナル。妹ハ、水納島主ヨノヌシ女房ニナル。彼土原大殿孫ヲソロト申者、若年ノ比ヨリ敬老愛幼ノ志深ク、朝夕、天ヲ拝ス。或時、運城・泊嶽両所ニ神霊光リ輝キ天降リタマフヲ、彼ヲソロ、拝ミ始メ崇敬ス。其比、塩川村ハリマニキヤモヤトテ、悪逆無道ノ者アリ。（中略）ハリマニキヤモヤ、大勢ニテ、ヨシカト申ス里ヲ散々ニ踏破リ通リケル。彼里人共立腹イタシ、四方ヨリ相囲ミ防戦ス。此勢ヒニ力ヲ得、土原ノヲソロ、後ヨリ責寄セ、ハ

リマニキヤモヤ一類不レ残討取タルトナリ。誠是、神ノ加護故ト弥崇敬イタシタルト也。[22]（傍線原田）

この話には、多良間島の「伊知ノアジ」と妻「ホナマヤ」が嶺間へ皆と耕作に出た際に大波が来たが、夫妻のみ助かり、その後三人の子に恵まれた。男子は「土原大殿」と名付け、姉は多良間島一方の主「ハリマ大殿」の女房に、妹は「水納島主ヨノヌシ」の女房になった。土原大殿の孫「ヲソロ」が運城・泊嶽両所を拝み始めた頃、塩川村の「ハリマニキヤモヤ」と争い、一味を残らず討ち取ったという内容が述べられている。

土原姓であること、名を「ヲソロ」（雍正旧記「おそろ」）ということ、運城御嶽と泊御嶽を拝み始めた人物という諸点からみて、ここの「土原大殿孫ヲソロ」が土原豊見親春源（幼名「おそろ」）と同一人物であることは間違いないであろう。この『琉球国由来記』に加え、『雍正旧記』、『遺老説伝』、「土原豊見親ぬニィリ」、島の伝承等から推定すると、春源までの血脈は、

伊知ノアジ―土原大殿…平屋西―ヲソロ（土原春源）

ということになる。そして、『琉球国由来記』の記述が正しいとすると、土原ウガンに香炉が祭られている土原春源の祖父の名は「土原大殿」ということになるであろう。

『琉球国由来記』のこの話になぜ「平屋西」の名が記されていないのかが不審であるが、島の伝承では平屋西はヤマトから来た人とされていることを考えると、土原大殿と平屋西の間に血縁関係がないことになり、血縁関係を重んじた記述とするなら、「土原大殿孫ヲソロ」と記さざるをえないことになる。『琉球国由来記』のこの話に「平屋西」の名が記されていないのは、もしかしたらこのような背景があるのかもしれない。

なお、これと同じ話が『遺老説伝』にあるが、[23]明らかに本文に乱れがあり、人間関係と世代の関係がわかりにくくなってしまっている。『遺老説伝』の同話には、伊知ノアジの次女が「遠曽呂」に嫁ぐと記されているが、伊知ノアジの次女が自分の兄（土原大殿）の孫の「遠曽呂」に嫁ぐことはありえない。また、遠曽呂の注として「水納島の世農主土原大殿の孫」と記されているが、「水納島の世農主」と「土原大殿」は明らかに別人である。多良間島伊知ノアジとその親族・子孫の関係について考察する場合には、本文に乱れのある『遺老説伝』所収話ではなく、『琉球国由来記』所収話の方を利用するべきであろう。『遺老説伝』所収話の本文の乱れは、錯簡か転写間違いが原因と推定される。

運天家所有の「土原氏系図家譜正統」には「土原豊見親春源／童名宇増呂／父母不知為何人子／尚真王世代／弘治年間仲宗根豊見親玄雅随従到八重山島追罰徒全帰島嘉靖年間任多良間島主雖然久遠故生卒不詳」[24]と記されている。系図の冒頭に「吾雖為八代之末孫為後世子孫依旧聞記謹て誌之」とあることから、この家譜は土原氏八代春倫（一六九七～一七六一）が作成し、その後子孫が書き継いでいったものであることがわかる。興味深いことに、春倫は多良間島に来た高僧心海と交流を持つ縁に恵まれたようで、一七一一年（清・康熙五十）数え十五歳の時、心海と共に島を離れて首里に登っている。春倫は首里の中城御殿に八年奉公し、一七一九年（清・康熙五十八）帰島している。心海がなぜ多良間島に来たのかは不明であるが、現在の島の伝承では、流刑であったとも、法を広めるためであったともいわれている（島で調査すると、流刑説をとる話者の方が多かった）。

首里王府の命令で雍正五年（一七二七）に報告編纂された『雍正旧記』に「仲筋村の主、平屋西筋と申人の男子おそろ」と記され、琉球の正史『球陽』の外巻『遺老説伝』（一七四五年成立）に「仲筋村の主、平屋西なる者有り。一男を生得す。名を折曽盧と曰ふ」と記されているのに、なぜ八代春倫は土原氏系図家譜に「土原豊見親春源／童名宇増呂／父母不知為何人子」と書いたのであろうか。『雍正旧記』と『遺老説伝』が成立したのは春倫（一六九七～一七六一）の生存時のことであるから、多良間島の有力者で首里の中城御殿に八年奉公した経歴を持つ春倫が両書の内容を知らなかったとは考えにくい。総合的に判断すると、八代春倫は、土原氏系図家譜を作成する際、意図的に初代春源の父母の情報を欠落させた可能性が高いように思われる。

それではなぜ八代春倫は、初代春源の父母の情報を欠落させたのであろうか。その理由としては、春源の父「平屋西」の出自の問題が関係していると推測できる。平屋西が島の伝承のとおり「ヤマト」から来た平家の流れをくむ人物であったとすると、正史で源為朝の子孫であることを明記する首里王府には都合の悪い人物となってしまう。そこで、八代春倫は土原氏系図家譜に「平屋西」の名を意図的に記さず、「土原豊見親春源／童名宇増呂／父母不知為何人子」とあいまいに記したと推定することもできる。あるいは、平屋西が平家の流れをくむ人物ではなく、単に「ヤマト」から来た人物であったとしても、首里王府との関係を重視していた当時の春倫にとっては、何か不都合があったのかもしれない。

八代春倫が土原氏系図家譜に「平屋西」の名を意図的に欠落させている点から逆に、平屋西がヤマトの人であったという島の伝承が事実を伝えているのではないかという感想をいだく。島の伝承のとおり「平屋西」が「ヤマト」から来た人物であったとすると、「土原大殿」の娘に「平屋西」が婿入りし、その二人の間に生まれた息子が「おそろ」であったということになる。そうであったとすると、「土原大殿孫ヲソロ」という関係は成立する。また、平屋西の弟の「水納ペーンス」も平屋西と同時期に来たであろうから、水納ペーンスは「伊知ノアジ」の三子の中の妹と「水納島主ヨノヌシ」の間に生まれた娘に婿入りし、水納島を統治したと推定することもできよう。これ以上の関連資料がないため、事実関係は不明であるが、春源の父ペーンスが平家の流れをくむという多良間の平家伝説にはそれなりの説得力があることがわかる。

沖縄本島から遠距離にあることから、多良間島は流刑の島でもあったわけであるが、漂流者も少なからずあったようで、漂流者にまつわる多くの伝説が残っている。『雍正旧記』に「鷹の墓所の事」として「大和人」が多良間島のすぐ北にある水納島に漂着した逸話が記されており（『遺老説伝』の同話には「往昔之世日本国人一名漂流宮古水納島」とある）、これは「鳥塚」の伝説（百合若大臣伝説）としてよく知られている。[25] また、多良間島の古謡「鍛冶神のニィリ」[26]には、ヤマト（日本）で生まれた鍛冶神が沖縄島から宮古島を経由して多良間島に来たことがうたわれている。この神歌は、鍛冶の技術が日本からもたらされた経緯を述べていると推定され、注目される。

このように、古くから日本と多良間島には海の道を通じた交流があった。この交流の深さを考えると、この島に平家伝説が生じてもおかしくないともいえよう。

結語

以上で、多良間島の平家伝説についての筆者なりの考察を終えることとする。多良間島には、十六世紀に島を統治した土原豊見親春源の父親「ペーンス（平屋西）」が平家の流れをくむヤマト（日本）の人であったという伝承がある。また、春源のおじで水納島を統治していたとされる「水納ペーンス」は「ペーンス（平屋西）」の弟で、春源の多良間統一に協力したという伝承がある。『琉球国由来記』、『雍正旧記』、『遺老説伝』、「土原豊見親ぬニィリ」、多良間島の伝承等から推定すると、春源までの血脈は、

伊知ノアジ―土原大殿…平屋西―ヲソロ（春源）

ということになり、島の伝承のとおり「平屋西」がヤマトから来た人物であったとすると、「土原大殿」の娘に「平屋西」が婿入りし、その二人の間に生まれた息子が春源（幼名ヲソロ）であったということになる。壇ノ浦の戦は一一八五年（元暦二・文治元）のことであるから、十五世紀のペーンスと約三百年の開きがあり、年代的にはつながらないことは明らかであるが、ペーンスが「平家の流れをくむ日本人」であったとすると、その可能性は否定できないことになる（なお、多良間島には、ペーンス自身が壇ノ浦の戦から落ち延びた平家の落武者であったという伝承もある）。

南西諸島においては、源氏と平氏をめぐる伝説がそれぞれ存在している。源氏をめぐる伝説としては源為朝琉球渡来伝説が有名で、平氏をめぐる伝説としては平家落武者渡来伝説が知られている。源為朝琉球渡来伝説に関しては、琉球王朝初代の舜天は源為朝の子だとされ、各地に為朝伝説がある。[27] 平家落武者渡来伝説に関しては、鹿児島県の奄美諸島に平家伝説が多数存在している。[28]

通常、沖縄県には平家伝説はほとんどないとされている。与那国島の「八嶋墓（大和墓）」（方言で「だまとぅはが」）の伝説は、明治二十六年（一八九三）八月に与那国島に渡った笹森儀助が『南嶋探験』で「往時源平ノ戦八嶋ニ敗レテ、此地ニ遁レタル人ノ墓ナリト」[29] などと記して以来、広く知られるようになったものである。戦前までは信じる者も多くいたようであるが、戦後の九州大学の調査で遺骨は近世の人骨らしいこと等が指摘されてからは、あまり語られなくなっているようである。[30]

多良間島の平家伝説がいつから語られてきたものかはよくわからないが、なぜ多良間島に平家伝説が存在するようになったのであろうか。日本と多良間との交流は海の道を通じて昔から存在したこと、ペーンスは日本から来た人物であった可能性が高いこと、「ヤマト墓」が存在すること、『遺老説伝』等にみえる「平屋西」という表記の存在（平家を連想する）などが多良間島の平家伝説の発生に重要な役割を果たしてきたと推定される。

琉球王権北端の奄美と琉球王権南端の先島に平家伝説がある点が注目されるが、その理由の一つとして、奄美も先島も首里と地理的に離れているため琉球王権の影響力が比較的緩やかであったことが関係しているように思われる。多良間島の平家伝説は、日本や琉球王権の影響力の問題を考察するうえでも重要な意味を持つものといえよう。

本稿では、多良間島の平家伝説を中心に考察したわけであるが、琉球王朝関連伝説等に関してはまだまだ未解明の点が多い。残された諸問題は今後の課題としたい。

〈注〉

(1) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書　第五』（井上書房・一九六二）、三五頁。

(2) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書　第四』（井上書房・一九六二）、四三頁。

(3) 桑江克英氏訳註『球陽』（三一書房・一九七一）、二一～二二頁。

(4) 宮古諸島の多良間島・水納島（沖縄県宮古郡多良間村）での調査は、平成十六年（二〇〇四）九月に行った。拙稿「沖縄・多良間島の嶺間按司伝説―神名遊びと話千両―」（「人文科学論叢」第三巻、二〇〇五・3）、参照。

(5) 注3の『球陽』、五三頁。

(6) 話者は沖縄県宮古郡多良間村仲筋の仲間三盛さん（S3・5・15）。平成十六年（二〇〇四）九月二十三日・原田調査、採集稿。

(7) 『平良市史　第三巻』（平良市役所・一九八一）、五二頁。

(8) 嘉手納宗徳編訳『球陽外巻　遺老説伝』角川書店・一九七八）、一〇七頁。

(9) 『多良間村史　第六巻』（多良間村・一九九五）、三四四頁。「土原豊見親ぬニリ」（原田注…「リ」に鼻音の半濁点を付す）とあるが、本稿では「土原豊見親ぬニィリ」と表記した。

(10) 話者は沖縄県宮古郡多良間村塩川の渡久山春好さん（T10・10・15）。平成十六年（二〇〇四）九月二十四日・原田調査、採集稿。

(11) 注9の『多良間村史　第六巻』の「土原ウガン」の項、二六五～二六六頁。

(12) 話者は沖縄県宮古郡多良間村塩川の砂川長清さん（T11・10・20）。平成十六年（二〇〇四）九月二十四日・原田調査、採集稿。

(13) 話者は注10の渡久山春好さん。平成十六年（二〇〇四）九月二十四日・原田調査、採集稿。

(14) 『多良間村の民話』（多良間村役場・一九八一）、二〇七～二〇八頁。話者は水納の宮国岩松さん（T6・9・20）。

(15) 注14の『多良間村の民話』、二〇七頁。

(16) 注7の『平良市史　第三巻』、五三頁。

(17) 外間守善・波照間永吉氏編『定本　琉球国由来記』（角川書店・一九九七）、四八二頁。

(18) 注9の『多良間村史　第六巻』、「水納御嶽」の項、二二六頁。

(19) 話者は注6の仲間三盛さん。平成十六年（二〇〇四）九月二十三日・原田調査、採集稿。

(20) 注14の『多良間村の民話』、二〇四～二〇五頁。話者は仲筋の下里春森さん（M37・10・10）。

(21) 『多良間村史　第四巻』（多良間村・一九九三）、一三八頁。

(22) 注17の『定本　琉球国由来記』、四八一～四八二頁。

(23) 注8の『球陽外巻　遺老説伝』、一三六頁。

(24) 『多良間村史　第二巻』（多良間村・一九八六）、六八頁。

(25) 永積安明氏「沖縄離島の百合若伝説―水納島の二つの伝承―」（同氏『沖縄離島』朝日新聞社・一九七〇、所収）。

(26) 注9の『多良間村史　第六巻』、三四七～三五三頁。

(27) 拙稿「実久三次郎と名柄八丸―為朝伝説と大島征伐伝説をめぐって―」（「新見公立短期大学紀要」第二十四巻、二〇〇三・12）、ほか。

(28) 高橋一郎氏『海原の平家伝承　奄美説話の原像』(三弥井書店・一九九八)、ほか。

(29) 笹森儀助著・東喜望氏校注『南嶋探験1』平凡社・一九八二)、二八一頁。

(30)『町史第一巻　与那国島』(与那国町役場・二〇〇二)、二二六～二二九頁。平成十七年(二〇〇五)八月に筆者原田も与那国島で調査したが、「八嶋墓(大和墓)」についてはほとんど伝承がなかった。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成十六年度～十八年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における豪族伝説の調査研究」の成果の一部である。

連絡先：原田信之　教養科
新見公立短期大学　〒七一八―八五八五　新見市西方一二六三―二

(二〇〇五年十一月九日受理)

原田　信之

Legend of Heike in Tarama Island

Nobuyuki HARADA

The Department of Liberal Arts, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

Tarama Island belongs to the Miyako Islands in Okinawa Prefecture. In Tarama Island, there was a hero named NUTABARU TOYUME who had ruled the island in the 16th century. The name of the father of NUTABARU TOYUME was PYENS. There is a legend that PYENS was a descendant of Heike. Heike is a famous samurai clan in Japan. It is usually said that there is few legends of Heike in Okinawa Prefecture. Therefore, a legend of Heike of Tarama Island is worth paying attention to. Why is there a legend of Heike in Tarama Island? The following points are thought to be the reason. Japan and Tarama Island had exchanges through the sea from old days. It is very likely that PYENS was the person who came from Japan. Kanji notation of PYENS reminds us of Heike. There is a grave called YAMATOBAKA meaning a Japanese grave in Tarama Island.

Key words: legend of Heike, Tarama Island, Ryukyu Dynasty